

通し番号	4649
------	------

分類番号	25-1A-12-02
------	-------------

製麺適性に優れる小麦品種‘さとのそら’が奨励品種になりました	
[要約] 日本麺用の小麦品種‘さとのそら’はこれまでの奨励品種‘農林61号’と比較して6日程度早く収穫できる早生品種である。耐倒伏性が強く、小麦縞萎縮病に強く、製粉性、製麺性に優れる。	
神奈川県農業技術センター・生産技術部・野菜作物研究課 連絡先 0463-58-0333	

[背景・ねらい]

本県の小麦奨励品種の‘農林61号’は関東以西で広く栽培されてきたが、長稈で、収量増や子実蛋白質含量向上を目指した施肥条件で栽培すると倒伏する場合があります。収穫の作業性が低下すること、また晩生品種であることから収穫調製作業と後作の大豆等の播種作業が競合すること、さらに各地で小麦縞萎縮病による減収が顕著となっていることなどから品種転換が求められている。

そこで群馬県農業技術センターが育成した早生で耐倒伏性に優れ、小麦縞萎縮病に強い‘さとのそら’の本県における特性を調査し、奨励品種化を目指す。

[成果の内容・特徴]

- 1 ‘さとのそら’を本県で栽培した場合、その特徴である小麦縞萎縮病およびうどんこ病耐病性、耐倒伏性および早生性が発揮され、また‘農林61号’並の赤かび病耐病性が発揮される。
- 2 標準品種‘農林61号’と比較した場合の特性は次のとおりである。
 - (1) 形態的特性

稈長は10cm程度短く、耐倒伏性は強い(表1)。秋播き性はIVで茎立ちが遅いため、凍霜害を受けにくい。穂長は同等で穂数は多く、収量性は同等である(表3)。
 - (2) 生態的特性

出穂期は4日、熟期は5日程度早い早生品種である(表2)。育成地等での特性検定の結果、小麦縞萎縮病に対する耐病性は「強」、うどんこ病に対する耐病性は「強」である。赤かび病に対する耐病性は‘農林61号’と同等の「中」である(表1)。
 - (3) 品質特性

千粒重、容積重はほぼ同等で、外観品質は同程度である(表3)。育成地における評価では、製粉性、製麺性は同程度からやや優れる。本県産の産物の製麺性は、ASW標準品よりやや劣るが、標準品(群馬県産‘さとのそら’)並との評価であった(表4)。

[成果の活用面・留意点]

- 1 稈長は短く、多肥条件でも倒伏し難いが、過剰な施肥は避ける。
- 2 赤かび病への耐病性は‘農林61号’と同等であり、防除は必須である。特に開花期の高温、降雨が予想される場合は、注意を要する。

[具体的データ]

表1 品種特性

品種名	株の開閉	耐倒伏性	脱粒難易	秋播性	耐病性			
					赤さび病	うどんこ病	赤かび病	小麦縞萎縮病
さとのそら	中	強	中	Ⅳ	強	強	中	強
(標)農林61号	中	中	中	Ⅱ	中	中	中	中

(育成地成績より抜粋)

表2 生育調査結果(平成22～25年産の平均値)

品種名	出穂期 (月.日)	成熟期 (月.日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/m ²)
さとのそら	4.18	6.5	81.4	9.1	451
(標)農林61号	4.22	6.11	92.8	9.1	405

表3 収量及び品質調査結果(平成22～25年産の平均値)

品種名	子実重 (kg/10a)	子実重 対照比 (%)	容積重 (g/L)	千粒重 (g)	外観 品質	子実蛋白質含量 (%)	
						24年産	25年産
						さとのそら	457
(標)農林61号	442	100	786	38.3	3.8	10.3	9.2

外観品質は1:上の上、2:上の下、3:中の上、4:中の中、5:中の下、6:下

表4 製麺試験結果(平成24年産)

品種名	生麺色 (5)	色 (20)	外観 (15)	麺官能評価			食味 (15)	合計 (70)
				色	食感			
					固さ (10)	粘弾性 (25)		
さとのそら(標準品)	3.0	14.0	10.5	7.0	17.5	10.5	10.5	70.0
ASW(標準品) ^z	3.3	14.9	10.5	7.2	19.0	11.1	10.5	73.2
さとのそら(神奈川県産)	3.0	14.0	10.5	6.9	17.5	10.5	10.5	69.9

製麺試験は[小麦のめん(うどん)適性評価法](平成9年12月1日)に準じて製粉協会にて実施。

各項目括弧内を満点とし、さとのそら(標準品)をその7割とした相対値で評価。

^z オーストラリア産輸入小麦の共通標準品(Australian Standard White)

[資料名] 平成22～25年度神奈川県農業技術センター試験研究成績書(作物)

[研究課題名] 麦類奨励品種決定調査

[研究期間] 平成22～25年度

[研究者担当名] 三好理、久保深雪、辻本渉